

雅歌1-4章「愛するとは」

1A 出会い 1

1B 野にいる女 1-8

2B 着飾り 9-17

2A 付き合い 2

1B 宴の場 1-7

2B 田舎での出会い 8-17

3A 婚姻の準備 3

1B 待ち焦がれ 1-5

2B 婚礼の行列 6-11

4A 婚姻の完成 4

1B 美しい妻の容貌 1-7

2B 完成 8-16, 5:1

本文

雅歌の学びに入ります。早速1章1節を読んでみましょう。

1A 出会い 1

1B 野にいる女 1-8, 5:1

1:1 ソロモンの雅歌

「雅歌」というのは、直訳では「歌の中の歌」という意味です。これはその表現のごとく、最上の歌ということです。伝道者の書では、「空の空」というのがありますが、「空しさ中での空しさ」という究極の空しさが書かれていましたが、ここでは歌の中の歌を読んでいきます。

ソロモンという人物のことをもう一度、思い出してみましょう。「1列王 4:32-33 彼は三千の箴言を語り、彼の歌は一千五首もあった。彼はレバノンの杉の木から、石垣に生えるヒソプに至るまでの草木について語り、獣や鳥やはうものや魚についても語った。」ソロモンは、非常に知恵のある人、とても聡明な人であっただけでなく、美意識の強い人でした。歌を一千五首も作っています。さらに、自然の生き物に対して並々ならぬ興味と情熱がありました。ソロモンがそれでこの雅歌を歌にして、さらに夫婦の愛を自分の周りにある植物や動物に喩えながら、表現していきます。この書に出ている一つ一つの名称を調べていくと、確かに植物図鑑や動物図鑑を用意しなければいけないのではないか、と思われるほどです。

そして午前礼拝でお話ししましたが、彼は女についても良くも悪くも、多くのことを経験して、それ

を格言にしています。箴言において、また伝道者の書において、主を恐れない女、また妻ではない者たちとの付き合いが、いかに苦々しいものなのかを驚くような強い表現で書いています。彼は三百人の妻だけでなく、七百人のそばめもいましたから、主への愛から、その異教徒の女への愛に移ってしまい、それで偶像礼拝を自分も行なってしまったことが、列王記第一 11 章に記されています。

しかし、ソロモンは単なる女っただらしたたのではありません。伝道者の書には、彼は知恵を尽くして日の下で起こることを調べていて、空しくなり、それで快樂がどのようなものかも調べてみた、ということでそばめも手に入れました。さらに、妻たちとの関係も政略結婚という要素が強かったのです。当時は、周囲の国々との平和を維持のために、政略結婚によって維持していたのが通例でしたから、彼は主を愛することよりも、そうした世の流れに合わせてしまったという問題のほうがありました。

箴言においても、伝道者の書においても、そうした女についての苦々しさの中で、若いころからの妻については、そのすばらしさをたたえる言葉を残しています。「箴言 5:18-19 あなたの泉を祝福されたものとし、あなたの若い時の妻と喜び樂しめ。愛らしい雌鹿、いとしいかもしかよ。その乳房がいつもあなたを酔わせ、いつも彼女の愛に夢中になれ。」そして箴言の最後には、真珠よりもはるかに尊い、しっかりとした妻について書いています。伝道者の書には、「9:9 日の下であなたに与えられたむなしい一生の間に、あなたの愛する妻と生活を樂しむがよい。それが、生きている間に、日の下であなたがする労苦によるあなたの受ける分である。」とありました。

そして雅歌は、そうした夫婦の愛を、これまでかと言わんばかりに称えて、歌っている歌であります。前もって読んでこられた兄弟姉妹も感じたと思いますが、私はこうした公の礼拝の場で、この書を解き明かしていくのに、躊躇いを覚えています。非常に優れた書物、神が夫婦に与えておられる愛を教えている書物であると同時に、年齢や、結婚しているか独身であるか、そうしたものに対する配慮が必要になる書物だからです。実にユダヤ教では、30 歳にならないと読ませないというラビの通達があった程です。

しかし、良く考えてみると、神にとって夫婦愛というのは、全ての創造の初めのところに造られた、優先順位の高いものであることに気づきます。神が六日で天地を創造されましたが、六日目に人を造られた時に、男と女に造られました。そして生めよ、増えよ、という生き物に対する祝福命令に加えて、男女に対しては「一心同体になる」という約束を与えておられます。これが結婚制度であり、神はご自身のかたちに似せて人を造られ、それからご自分の民とつながりを持つときに、ご自身を夫とし、神の民を妻として表現して、私たちと神との関係は、ちょうど妻と夫の関係のそれであることを教えておられるのです。そして新約聖書に入りましたら、教会が花嫁です。そしてキリストが花婿です。「エペソ 5:31-32」それゆえ、人はその父と母を離れ、妻と結ばれ、ふたりは一心同体となる。」この奥義は偉大です。私は、キリストと教会とをさして言っているのです。」したがって、私

たちが雅歌を読んでいくにあたって、神との愛の関係を知っていくこともできるのです。

1:2 あの方が私に口づけしてくださったらよいのに。あなたの愛はぶどう酒よりも快く、1:3 あなたの香油のかおりはかぐわしく、あなたの名は注がれる香油のよう。それで、おとめらはあなたを愛しています。1:4 私を引き寄せてください。私たちはあなたのあとから急いでまいります。王は私を奥の間に連れて行かれました。私たちはあなたによって楽しみ喜び、あなたの愛をぶどう酒にまさってほめたたえ、真心からあなたを愛しています。

雅歌は、ソロモンの一人の女とのやり取りによって成り立っています。そして応援団のように、エルサレムの娘たちがこの女に付いていっています。一人がソロモンを独唱し、他の誰かが女の分を独唱し、そして娘たちの部分は複数合唱していたのでしょう。

この女についてですが、6章13節にて「シュラムの女」とあります。イスラエルの町の名前で「シュネム」があります。メギドがあるイズレエル平野の西側にあり、北はガリラヤ、そしてヘルモン山があり、レバノンがあるという自然に恵まれたところです。シュラムはシュネムに由来しているかもしれません。そして「シュラム」は、ソロモンという名前を女性形のようにした名前になっています。「ミス・ソロモン」みたいに書いてあります。

そうすると、この女は、もしかしたらアビシャグかもしれません。アビシャグについての紹介は、列王記第一1章にあります。1節から読みます。「ダビデ王は年を重ねて老人になっていた。それで夜着をいくら着せても暖まらなかった。そこで、彼の家来たちは彼に言った。『王さまのためにひとりの若い処女を捜して来て、王さまにはべらせ、王さまの世話をさせ、あなたのふところに寝させ、王さまを暖めるようにいたしましょう。』こうして、彼らは、イスラエルの国中に美しい娘を捜し求め、シュネム人の女アビシャグを見つけて、王のもとに連れて来た。この娘は非常に美しかった。彼女は王の世話をするようになり、彼に仕えたが、王は彼女を知ろうとしなかった。(1列王 1:1-4)」家来はハーレムの一人としてアビシャグを王のもとに連れてきましたが、王はそれを拒みました。アビシャグは専ら、王の介護を行っていました。

これをソロモンは、ずっと見ていたはずですが。父が死に、その後、兄弟たちの間に権力闘争がありました。父の息子アドニヤが、他のダビデの家来たちを自分に引き寄せて、父の死後、王権を自分のものにしようと企てました。けれども、ソロモンの母バテ・シェバと預言者ナタンによる俊敏な対応によって、その危機は免れました。ソロモンが無事に王として即位しました。ソロモンはアドニヤに猶予を与えました。ところがアドニヤはハテ・シェバに、「本当は私が王になるはずなのに、主がそうされませんでした。その代わりに言うては何ですが、シュネム人アビシャグを私に妻としてくれませんか。」と頼んだのです。ところがそれを聞いたソロモンは非常に怒りました。そしてアドニヤを討ち取らせました(1列王2章参照)。このようにソロモンは、アビシャグのことでかなり強い反応を示しました。王位が危ぶまれることもあったでしょうが、それだけではなかったかもしれません。

ソロモンは彼女を愛していたのであろうと思われれます。

ここで、シュラムの女は熱烈にソロモンの愛を求めています。しかし、その求愛は、彼の愛や彼の名がぶどう酒よりもまさるといところから、ソロモンの愛から始まっています。名前は、聖書ではしばしば、その人の人格、性格そのものを表します。その人の外見以上に、その人の持っている富以上に、その人自身が慕わしいものになっているかどうかです。そして、私たちは同じように、イエス様の愛、そしてその方の名を慕っています。「イエスの名をほめたたえます。」と歌っていますが、まさにそれは主が私をこよなく愛してくださったことに基づいています。

そして「私を引き寄せてください。」と言っていますが、ソロモンが率先しないと彼女は彼に近づくことはありません。そうです、男が女に言い寄るところから始まります。そして、相互の関係がなければなり立ちません。男を神は造られ、それから男から女を造られたのです。ですから、男が動かなければ女は動けないのです。イエス様も同じでした。私たちが神を愛したからではなく、神がキリストにあって初めに私たちを愛されたから、だから私たちはイエス様を愛します。

1:5 エルサレムの娘たち。私はケダルの天幕のように、ソロモンの幕のように、黒いけれども美しい。1:6 私をご覧にならないでください。私は日に焼けて、黒いのです。私の母の子らが私に向かっていきりたち、私をぶどう畑の見張りに立てたのです。しかし、私は自分のぶどう畑は見張りませんでした。1:7 私の愛している人。どうか教えてください。どこで羊を飼い、昼の間は、どこでそれを休ませるのですか。あなたの仲間の群れのかたわらで、私はなぜ、顔おおいをつけた女のようにしていなければならないのでしょうか。1:8 女のなかで最も美しい人よ。あなたがこれを知らないのなら、羊の群れの足跡について行き、羊飼いの住まいのかたわらで、あなたの子やぎを飼いなさい。

ここには、自分のありのままをソロモンの愛の保証によって、受け入れられているシュラムの女の人たちの姿があります。5節を見てください、彼女が、自分が色黒であることを美しいと言っています。宮廷にいる女は外に出ていませんし、当時、中東では色白が美しいとみなされていました。ところが、自分が色黒であることを美しいということができているのです。それは一重に、8節、「女の中で最も美しい人よ」とソロモンが愛によってそうみなしているからです。

私たち人間は、女性に限らず男性もですが、自分のそのままの姿が受け入れられないのではないか、という不安を絶えず抱えています。そこからすべて、自分が何とかして受け入れられようと、あらゆることをします。そして、人は、自分たちの中で受け入れられる形式を作り上げて、その型に自分をはめようとして落ち着かせようとしています。「美人」というのは、その典型例です。美人は、平安時代ならおたふく、江戸時代なら浮世絵にあるような切れ目です。しかし、今は、これらは、整形手術するように女性たちはしたいと、願うものばかりです。しかし、そのありのままの姿が実は美しい、そういうことに気づく人は幸いです。けれども、自分でそれをするにはできません。神が、

それをする事がおできになります。なぜなら、神がそのように造られたからです。そして、神が受け入れておられることを知る人は、シュラムの女のように心が安定します。

ここに、シュラムの女の背景があります。彼女は、ガリラヤ地方の田舎で育っていた、素朴な女性でした。「母の子らが」と言っていますが、父は既に死んでいたのかもしれませんが、それで兄たちが父代わりをしていたのでしょう。兄たちが妹に怒って、それでぶどう畑の見張りに立てていました。そして、「自分のぶどう畑は見張りませんでした」と言っていますが、これは自分自身のことです。自分の顔のこと、体のことは世話する余裕などありませんでした、ということです。そんな時に、彼女がアビシャグなら、ダビデの家来たちが来て彼女に目を付けたのでしょう。それから、後に彼女はソロモンの妻として選ばれます。ですから、シュラムの女は突如として、ソロモンの寵愛により、王宮の妻に召し入れられることになるのです。

それで、彼女の心は非常に不安でした。「どこで羊を飼い、昼の間は、どこでそれを休ませるのですか。」と言っていますが、これは比喻です。ソロモンのことを羊飼いになぞらえています。「あなたの仲間の群れのかたわらで、私はなぜ、顔おおいをつけた女のようにしていなければならない」と言っていますが、この顔覆いは中東では売春婦にみなされます。昔、ヤコブの息子ユダが、通りにいた覆いをしていた嫁タマルを買ったという話が創世記 38 章にあります。つまり、たくさんの女たちがいるなかで、ソロモンは彼女には特別な愛を降り注いでいたけれども、そのような寵愛がかえって、彼女がふしだらな女に見られるのではないか、という不安を抱えていたのです。そこでソロモンはさらなる、愛による保証を与えます。

2B 着飾り 9-17

1:9 わが愛する者よ。私はあなたをパロの戦車の雌馬になぞらえよう。1:10 あなたの頬には飾り輪がつき、首には宝石をちりばめた首飾りがつけてあって、美しい。1:11 私たちは銀をちりばめた金の飾り輪をあなたのために作ろう。

今の私たちがこれを聞けば、ちょっと分からないどころか、失礼に当たるでしょう。しかし、この表現は女に対して、最高のほめ言葉を使っています。ソロモンは、馬が好きでした。しかも、馬の中でもエジプトからの輸入品は極めて優れたものであります(1列王 10:28-29)。そして戦車には、このように雌馬など付けません、雄の馬が使われますが、ソロモンはこのように飾り立てた雌馬があれば、その華麗で全ての人が目を引きます。11 節は、エルサレムの娘たちがその装飾を後押ししています。

使徒パウロが、夫に対して妻を愛しなさいと言った時に、キリストが教会に対して行なわれたことを次のように表現しています。「エペソ 5:25-27 夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、ご自身で、しみや、し

わや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。」神の恵みは、このようにして私たちが義また聖による装飾物によって着飾ってくださったのです。そこで女は、一気に自分の不安が解消されて、ソロモンへの愛で胸が高鳴ります。

1:12 王がうたげの座に着いておられる間、私のナルドはかおりを放ちました。1:13 私の愛する方は、私にとっては、この乳房の間に宿る没薬の袋のようです。1:14 私の愛する方は、私にとっては、エン・ゲディのぶどう畑にあるヘナ樹の花ぶさのようです。

ナルドも、没薬も、そしてヘナ樹の花ぶさも、みな香りを放つものであります。それを彼女は自分の胸のところなどに身に付けていました。ソロモンは今、宴の座にいます。ですから、数多く人々がいるけれども、そんなことも気にならず一心にソロモンを見つめ、ソロモンがいかに香しいかを表現しています。キリストも香りを放っておられる方です。「エペソ 5:2 キリストもあなたがたを愛して、私たちのために、ご自身を神へのささげ物、また供え物とし、香ばしいかおりをおさげになりました。」

1:15 ああ、わが愛する者。あなたはなんと美しいことよ。なんと美しいことよ。あなたの目は鳩のようだ。1:16 私の愛する方。あなたはなんと美しく、慕わしい方でしょう。私たちの長いすは青々としています。1:17 私たちの家の梁は杉の木、そのたるきは糸杉です。

ソロモンが再び、愛の保証を与えています。鳩の目に彼女の目を喩えています。それから、女もソロモンを慕わしいと言っています。そして長いすのこと、また自分たちの家のことを話しています。これは後に女が、ソロモンの家に入って夫婦として過ごすことを夢見ている姿です。

2A 付き合い 2

そして宴の場における、二人のやり取りが続いています。

1B 宴の場 1-7

2:1 私はシャロンのサフラン、谷のゆりの花。2:2 わが愛する者が娘たちの間にいるのは、いばらの中のゆりの花のようだ。2:3 私の愛する方が若者たちの間におられるのは、林の木の中のりんごの木のように。私はその陰にすわりたいと切に望みました。その実は私の口に甘いのです。2:4 あの方は私を酒宴の席に伴われました。私の上に翻るあの方の旗じるしは愛でした。

シュラムの女は多くの女性と同じような美しさはあるかもしれないけれども、と控えめに言っているのに対して、ソロモンは「茨の中のゆりだ」と際立たせています。そして、宴の席では、彼女のための旗印を作っています。田舎娘であるはずの彼女が、こうした宴の場に出ること自体、かなり身が引くのですが、そのことを気遣ってソロモンは、彼女がひとときわ美しいと安心を与え、それから彼女を公でも守ってあげる配慮をしています。このように、ただ愛しているというだけでは、不十分で

あることをソロモンは知っていたのです。

2:5 干しぶどうの菓子で私をカづけ、りんごで私を元気づけてください。私は愛に病んでいるのです。2:6 ああ、あの方の左の腕が私の頭の下にあり、右の手が私を抱いてくださるとよいのに。

愛に押しつぶされそうになっています。そして、ソロモンの胸の中に抱かれないという、どうしようもない強い思いが与えられています。愛というのは、このように「あなたは特別なのだ」という保証を与えます。そして、その保証の中で、その人を守るのです。ここに初めて、「私は愛されている、だから守られている」という安心が生まれ、それで初めて、彼女はソロモンに自分の全てを任せようと思うのです。

それが、夫と妻の関係になります。「エペソ 5:24-25 教会がキリストに従うように、妻も、すべてのことにおいて、夫に従うべきです。夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。」夫が自分の体のように妻を愛しなさい、と後にあります。私たちがキリストに全てを明け渡し、その何もかも捨てることができるのは、もちろんキリストがご自身を全てお捨てになった、その愛の保証があるからです。その担保があるので、イエスを主として従っていくことができます。

多くの人が、「私はイエス様に従えていない。」と言います、それは問題意識が間違っています、イエス様に従えていないのではなく、イエス様の愛をまだ十分に受け取っていないのです。そこで、自分をしっかりと持っていて、その中でイエス様に従おうとしてしまっています。そのしっかり持っている自分をも主に明け渡すことによって、肌が黒くてもそれを何よりも美しいと言って、しかも最上に美しいと言ってくれるその愛に触れるのです。ですから、自分の弱さをそのまま主に明かしていくということが必要です。

2:7 エルサレムの娘たち。私は、かもしかや野の雌鹿をさして、あなたがたに誓っていただきます。揺り起こしたり、かき立てたりしないでください。愛が目ざめたいと思うときまでは。

かもしかや雌鹿は、非常に敏感な動物です。ちょっとした物音で飛び跳ねて逃げていきます。その動物に誓って、私を揺り動かしたり、かき立てたりしないで下さい、とお願いしています。つまり、ソロモンへの想いは非常に敏感で繊細なものなんだ、ということです。「愛が目ざめたいと思うときまでは」と言っているのは、恣意的に起こすことがあってはならないということです。彼女は時を待っているのです。

この言い回しはまた後で出てきます。そして結婚式を挙げ、初めての夜を過ごした後には出てきません。つまり、愛が目ざめたいと思う時とは結婚のことです。その時に向かって、彼女はじゅくりと待っているのだということです。待つ、待つ、そしてその人に自分の一生を捧げるという誓

いをした中で床入りする時に、結婚の奥義を知ることができます。最近、一般のニュースで四年半、付き合っていたけれどもキスすることも待ち、結婚式の時に初めてのキスをしたということが、話題になっていました。結婚まで待つということは消極的なことではなく、むしろ最も結婚というものを、最高のもの、最上のものとする積極的なものなのです。

そして霊的には、私たちは同じ待ち焦がれによって、主を待っています。花婿であられるキリストを花嫁のようにして待ち、そして主が戻って来られる時は、最上の喜びを得ることができるでしょう。

2B 田舎での出会い 8-17

2:8 愛する方の声。ご覧、あの方が来られます。山々をとび越え、丘々の上をはねて。

場所が移っています。ここは、彼女の故郷、田舎にある家です。そこに、ソロモンが彼女と、結婚前提の交際をするためにやって来ています。

2:9 私の愛する方は、かもしかや若い鹿のようです。ご覧、あの方は私たちの壁のうしろにじっと立ち、窓からのぞき、格子越しにうかがっています。2:10 私の愛する方は、私に語りかけて言われます。「わが愛する者、美しいひとよ。さあ、立って、出ておいで。2:11 ほら、冬は過ぎ去り、大雨も通り過ぎて行った。2:12 地には花が咲き乱れ、歌の季節がやって来た。山鳩の声が、私たちの国に聞こえる。2:13 いちじくの木は実をならせ、ぶどうの木は、花をつけてかおりを放つ。わが愛する者、美しいひとよ。さあ、立って、出ておいで。2:14 岩の裂け目、がけの隠れ場にいる私の鳩よ。私に、顔を見せておくれ。あなたの声を聞かせておくれ。あなたの声は愛らしく、あなたの顔は美しい。2:15 『私たちのために、ぶどう畑を荒らす狐や子狐を捕えておくれ。』私たちのぶどう畑は花盛りだから。」

彼女はイズレエル平野のシュネムというところにいます。そこは、今でもイスラエル有数の穀倉地帯であり、ここにあるように豊かな農耕地が広がっていたのでしょう。そこに、王なるソロモンがわざわざ、彼女の家のところまで来て、呼び出しているのです。冬が過ぎ去り、春がやって来たと彼は言っています。イスラエルでは冬に雨が降り、土がぬかるみますので、移動する時は春になります。時期が来たので、ようやく動くことができたということです。けれども、ここにも隠喩があります。つまり、もはや結婚の時期が近づいていますね、ということです。二人は付き合いながら、じつくりとその時期が来るのを待っていたのです。

結婚前提の付き合いをする時に、私たちはとても繊細な時期を通ります。それは、もちろん互いが好きであることは分かっています。しかし、その付き合いの中でもしかしたら、その人よりも大切な事柄が出てくるかもしれません。そうしたら、その人と一緒になることはやめる、結婚する前にこの婚約を破棄する、ということもあり得るのです。それが妥当な理由であれば仕方がないのですが、そうではなく自分の軽率な選り好みでやめてみることは、結婚の根底を崩すものであり、その

人は結婚する資格がありません。

これはあらゆる人間関係、また教会生活にも通じることです。いっしょにいろいろと活動することはするにしても、相手にとってとても大切な時に、その肝心の時に限って自分の都合を優先するというのは、相手を裏切ることになります。それは、相手も犠牲を払って、自分を優先させてきたのに、その愛を裏切る行為になるのです。友が苦しんでいる時にこそ、その友情が試されるということが箴言に書いてありますが、大切な時に自分の都合を持ってくるのです。このようなことをする人には、愛がありません。

ソロモンはここでも、愛の保証を与えています。シュラムの女は、家からなかなか出てこない様子です。「岩の裂け目、がけの隠れ場にいる私の鳩よ。」と言っています。そして、彼女がようやく外に出てきたのですが、そこには「狐や子狐」がいます。これらも追い散らしてくれ、と言っています。もしかしたら、これはソロモンではなく、シュラムの女が言った言葉かもしれません。彼女が外に出ていくということは、それが田舎の人々に知られるのですから、そしてソロモンがいつまでもいるわけではないのですから、彼女が悪く見られる、ひどければ晒しにされてしまう、ということは有りうるのです。こうやって付き合いの時から、相手の人をいかに守っていくのか、結婚した後にすることの予行練習をしています。

2:16 私の愛する方は私のもの。私はあの方のもの。あの方はゆりの花の間で群れを飼っています。2:17 私の愛する方よ。そよ風が吹き始め、影が消え去るころまでに、あなたは帰って来て、陰しい山々の上のかもしかや、若い鹿のようになってください。

16 節の言葉は、一心同体になる夫婦と同じ思いであります。相手は自分のものであります、これは夫婦関係で、その性生活において自分の体を主張してはいけない、相手のものなのだ、という言葉がコリント第一 7 章にあります。それだけではありません、自分も相手のものなのです。イエス様は霊的に、「ヨハネ 6:56 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしも彼のうちにとどまります。」と言われました。イエス様が私の内におられ、また私もイエス様の内におられます。このような関係で初めて一つになっています。

そして、ここではシュラムの女は、ソロモンが昼間は王の務めを行なっていることを、安心してみていることができます。「群れを飼っている」と言っていますが、それはイスラエルの民を治めている姿です。そして、陰が消え去るころというのは、夕暮れになるということです。つまり、夕暮れまでにはソロモンが来て、それで愛を楽しめるようになれるわね、という将来の夫婦生活の安心感があるのです。このような妻は幸せですね、夫が愛を保証しているから、妻は夫がしている仕事について、とやかく言わないのです。夫と離れているときでも、その愛を疑うことがありません。

私たち教会と主イエス様の関係も同じでしょう。イエス様は、ご自身が戻ってくるまでは、ご自分

の働きをこの地上で聖霊によって行われています。そして、何でそんなことが起こるのか、私たちには知られていないことは、多々あります。しかし、主はご自身のお仕事を行なわれているのだ、というこの方への信頼が必要になるのです。そしてすべてが明らかにされるのは、主が戻られてから。顔と顔を合わせてこの方を見る時が来ます。それまでは、全てのことが知られていなくても、私たちは主がしておられることだから、と耐え忍ぶ必要があるのです。

3A 婚姻の準備 3

1B 待ち焦がれ 1-5

3:1 私は、夜、床についても、私の愛している人を捜していました。私が捜しても、あの方は見あたりませんでした。3:2 「さあ、起きて町を歩き巡り、通りや広場で、私の愛している人を捜して来よう。」私が捜しても、あの方は見あたりませんでした。3:3 町を歩き巡る夜回りたちが私を見つけました。「私の愛している人を、あなたがたはお見かけになりませんでしたか。」3:4 彼らのところを通り過ぎると間もなく、私の愛している人を私は見つけました。この方をしっかりつかまえて、放さず、とうとう、私の母の家に、私をみごもった人の奥の間に、お連れしました。3:5 エルサレムの娘たち。私は、かもしかや野の雌鹿をさして、あなたがたに誓っていただきます。揺り起こしたり、かき立てたりしないでください。愛が目ざめたいと思うときまでは。

シュラムの女は、ソロモンとの結婚が近づくにつれて、わずかな不安との戦いの中で、ますます込みあがってくる結婚への願望が夢の中に表れています。「夜、床についても」というのが、夢を見ていることを示しています。何かというと、彼が自分から離れてしまうのではないか、という恐れです。まだ婚約はしていてもまだ誓約していないのですから、離れてしまう可能性はゼロではないのです。それで、夢の中で、見つけたソロモンをしがみついて離さず、それで自分の母の奥の間に連れて行って、そこで結ばれるところまで夢の中で見えています。これは試みの期間です。私たちも、主が来られるまでは試みの期間です。自分はあらゆるものを捨てて、この人に結ばれるために捧げる準備をします。しかし、それを両者がそれぞれ行なっていなければ、傷つきます。近づけば近づくほど、心の中での葛藤、せめぎ合いが続くのです。

しかし、彼女は待っています。先ほどと同じ言い回し、「揺り起こしたり、かき立てたりしないでください。愛が目ざめたいと思うときまでは。」を使っています。結婚になるまで、かき立てないでくださいと願っています。そうです、性的な結びつきは、そこに至るまでの、しっかりとした吟味、自分の計画であるとか、動機、現実的な経済状況、そして価値観を共有しているかなど、いろいろな意味で調べていくことが必要です。完全に相手にささげる誓いが結婚ですから、その中心に性行為があります。

2B 婚礼の行列 6-11

そしてついに、婚礼が始まります。

3:6 没薬や乳香、貿易商人のあらゆる香料の粉末をくゆらして、煙の柱のように荒野から上って来るひとはだれ。3:7 見なさい。あれはソロモンの乗るみこし。その回りには、イスラエルの勇士、六十人の勇士がいる。3:8 彼らはみな剣を帯びている練達の戦士たち。夜襲に備えて、おのおの腰に剣を帯びている。

当時の婚礼は、花婿が行列を作って、花嫁の家まで迎えにいくところから始まります。そして、花嫁を引き取り、自分の家に招き入れます。そしてそこで婚姻、その後の祝宴があります。そして、二人きりになって、結ばれるのです。この初めの花嫁を迎えるための行進の様子が書かれています。十人の乙女のたとえを思い出してください、それがその行列の場面です。既に、この行列がイズレエル平原にあるシュネムまで行き、彼女を引き取り、それからその行列がヨルダン川沿いを南下しました。それからエリコの辺りで右に曲がり、エルサレムに上って行きます。そこはユダの荒野です。それで今、荒野から上っていると表現しているのです。

もう一度、シュラムの女が田舎に住む普通の女の子であったことを思い出してください。その女性にソロモンが王の妻として迎えます。彼女の不安を想像してください、けれどもソロモンは彼女にあらゆる飾り物を付け、あらゆる香料を放つようにさせて、王の花嫁として、このみこしに運んでいるのです。6 節にある香料は、彼女から放たれるものです。彼女が確かに、ソロモンの愛する花嫁としての好意を受けています。

ここに、すばらしい神の恵みがあります。私たちは、神から離れて罪の中に死んでいましたから、自分の価値というものがありません。そこから不安が出てくるから、自分で自分を守ろうとしてしまいます。しかし、私たちの善行の最高ものであっても、不潔な着物のようであるとイザヤ書に書いてあります。しかし、王なるキリストは私たちを花嫁として召してくださいます。主が恵みをもって、私たちを着飾りますが、それを実行されるのは携挙の時です。主はご自分の香りを私たちに与えてくださり、そして清純な花嫁として、栄光に輝く花嫁としてイエス様に連れてこられるのです。

そしてソロモンは、しっかりと彼女の乗っているみこしを、精鋭部隊によって護衛させています。ガリラヤ地方からエルサレムまでは長い距離です。そこには、イエス様が良いサマリア人で半殺しにされた男のたとえを話されましたが、強盗がいたり危険であります。それについても、ソロモンが彼女に愛の保証を与えて守り、このような護衛をつけています。私たちも、主の携挙にあずかるときに、主は御使いも連れてこられますから、あらゆる霊の勢力から守られて私たちは引き上げられるのです。

3:9 ソロモン王は、レバノンの木で自分のためにみこしを作った。3:10 その支柱は銀、背は金、その座席は紫色の布で作った。その内側はエルサレムの娘たちによって美しく切りばめ細工がされている。

このみこしは、ソロモンが命じて作らせたものでした。そこは移動する玉座でありました、ですから中に銀や金、紫色の布が作られています。そしてエルサレムの娘にも装飾を施させています。そこにシュラムの女を載せたのです。彼女は、あらゆるものから守られていただけでなく、ソロモンの愛のゆえ、彼の王座と同じ所に着かせてもらっています。これはすごいことですね、しかし、私たちがイエス様からの愛によって、このようにさせていただいています。「キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。(エペソ 2:6)」

3:11 シオンの娘たち。ソロモン王を見に出かけなさい。ご自分の婚礼の日、心の喜びの日のために、母上からかぶらせてもらった冠をかぶっている。

ここで婚礼であります。ソロモンが、母バテ・シェバが用意した冠をかぶっています。これは、王冠ではなく、婚姻のための特別な冠ということです。

4A 婚姻の完成 4

1B 美しい妻の容貌 1-7

そして、ついに二人だけの時間に入ります。ここで結婚が完成します。

4:1 ああ、わが愛する者。あなたはなんと美しいことよ。なんと美しいことよ。あなたの目は、顔おおいのうしろで鳩のようだ。あなたの髪は、ギルアデの山から降りて来るやぎの群れのよう、4:2 あなたの歯は、洗い場から上って来て毛を刈られる雌羊の群れのようだ。それはみな、ふたごを産み、ふたごを産まないものは一頭もない。4:3 あなたのくちびるは紅の糸。あなたの口は愛らしい。あなたの頬は、顔おおいのうしろにあって、ざくろの片割れのようだ。4:4 あなたの首は、兵器庫のために建てられたダビデのやぐらのようだ。その上には千の盾が掛けられていて、みな勇士の丸い小盾だ。4:5 あなたの二つの乳房は、ゆりの花の間で草を食べているふたごのかもしか、二頭の子鹿のようだ。

ソロモンは、ずっとあなたは美しい、最も美しいと言っていました、今、彼は確かにその美しさを最上の喜びで享受しています。その表現たるや、私たちにはイスラエルの自然など、想像するのが難しいものがありますが、彼は彼女の目から見えています。男であれば、もし相手に対する真実な愛がなく、単なる肉欲に任せるのであれば、見る場所がそこからでないことを知っているでしょう。カナン人の偶像アシュタロテが、乳房が異様に大きく、しかも数多く作られているところからもよく分かります。ですからソロモンは、彼女の肉体を欲しているのではなく、彼女そのものを、人格をもって本当に愛しています。だからこそ、まず目を見るのです。そこから、意思疎通、人格の交流をしています。そして歯を見て、唇を見えています。そして頬を見えています、まだこの時点で顔覆いがあります。そして首を見えています、興味深いです、ダビデのやぐらのようだ、と言っています。まっすぐになっていたのでしょうか。そして最後に乳房です。

4:6 そよ風が吹き始め、影が消え去るころまでに、私は没薬の山、乳香の丘に行こう。4:7 わが愛する者よ。あなたのすべては美しく、あなたには何の汚れもない。

シュラムの女が、彼が彼女の家に来て行き、お付き合いをしていた時に 2 章 17 節で、この言葉を言っていました。ソロモンは、今その願いをかなえてあげるよ、と言っています。そして、ソロモンは再び、「あなたは美しい」と言っています。しかも、「あなたのすべては美しい」と言っています。今、彼女の全てを見ることができていますが、その全てを見ても美しいと言っているのです。しかも、ここで「あなたには何の汚れもない。」と言っているのです。

ここで大事なのは、彼女に欠けたところがなかったということではありません。愛しているからこそ、何の欠けもない、美しいとみなすことができるのです。これは、いわゆる「愛は盲目だ」ということでもありません。確かに色黒であり、田舎にいる一人の娘です。彼女はその弱さや弱点を知っていましたが、その中にあっても自分はソロモンの愛のゆえに、全く美しいものとみなしています。主は荒野で宿営するイスラエルの民のことを、そのようにみなしていました。「ヤコブの中に不法を見いださず、イスラエルの中にわざわいを見ない。(民数 23:21)」「なんと美しいことよ。ヤコブよ、あなたの天幕は。(24:5)」神の一方的な愛は、このように何も不法を見ない、なんと美しいことよ、と言わしめるのです。

皆さんは、この愛を受けているでしょうか？どこかでいつも、自分に負い目があると思っていまいませんか？それを否定してはいけません、負い目はあるのです。しかし、その負い目があってもなおのこと、主は、「あなたには不法がない。あなたは美しい。」と仰られます。

2B 完成 8-16

4:8 花嫁よ。私といっしょにレバノンから、私といっしょにレバノンから来なさい。アマナの頂から、セニルとヘルモンの頂から、獅子のほら穴、ひょうの山から降りて来なさい。

ソロモンがここで言っているのは、いっしょにこの喜びを共にしようではないか、ということです。ちょうどジェットコースターで一番上に上がって、これから落ちるといふその興奮を、山から降りることによって表現しています。

4:9 私の妹、花嫁よ。あなたは私の心を奪った。あなたのただ一度のまなざしと、あなたの首飾りのただ一つの宝石で、私の心を奪ってしまった。4:10 私の妹、花嫁よ。あなたの愛は、なんと美しいことよ。あなたの愛は、ぶどう酒よりもはるかにまさり、あなたの香油のかおりは、すべての香料にもまさっている。4:11 花嫁よ。あなたのくちびるは蜂蜜をしたたらせ、あなたの舌の裏には蜜と乳がある。あなたの着物のかおりは、レバノンのかおりのようだ。

接吻、そして前戯です。何度も何度も、「私の妹、花嫁よ。」と言っています。これは、女性として

男の人に明け渡す、そのこよなく愛してくれる人、夫に明け渡して完成した妻としての状態を示す言葉です。

4:12 私の妹、花嫁は、閉じられた庭、閉じられた源、封じられた泉。4:13 あなたの産み出すものは、最上の実をみのらすざくろの園、ヘンナ樹にナルド、4:14 ナルド、サフラン、菖蒲、肉桂に、乳香の取れるすべての木、没薬、アロエに、香料の最上のものすべて、4:15 庭の泉、湧き水の井戸、レバノンからの流れ。4:16 北風よ、起きよ。南風よ、吹け。私の庭に吹き、そのかおりを漂わせておくれ。私の愛する方が庭にはいり、その最上の実を食べることができるように。

閉じられた庭、封じられた泉と言っていますが、彼女が処女であることを意味しています。そして、16節は女のほうが答えています、夫をすべて自分が受けている姿です。庭に北風と南風が吹くようにというのは、植物が育つための風ですね。東風ですと、乾燥していて作物をからすことは聖書に多く出ています。そして5章の1節も続きです。

5:1 私の妹、花嫁よ。私は、私の庭にはいり、没薬と香料を集め、蜂の巣と蜂蜜を食べ、ぶどう酒と乳を飲む。友よ、食べよ。飲め。愛する人たちよ。大いに飲め。

ソロモンが彼女の庭のことを自分の庭と言って、彼女の物が自分の物となったことを言い表しています。つまり、一心同体になったということです。

以上ですが、公の礼拝においてこの場所を詳しく説明するのは正直、気がひけます。しかし、とても大切な箇所です。なぜなら、「泉」という表現が使われていましたが、泉は聖書では御霊によって新たに生まれた人にもイエス様が使われた比喻です。私たちの尊厳、充足、安定、そうしたものが含まれている泉であります。しっかりとした夫婦の性生活ができていることは、妻も夫も安定した情緒を保つことができ、精神的にも、霊的にも健全さを保つことができます。

そしてそのような親しい交わりは、完全に互いに明け渡し、他のものから離れて、相手に結びつくことを選んだからこそ、できることです。私たちは、真実な満たしが欲しいと願いますが、誰に自分は寄り添っているのか、それとも自分の益になるから誰かに寄り添うのか？その人の愛がどこにあるかは、明らかなのです。一度、自分の愛はどこにあるのかを知る必要があるでしょう。

そして、私たちは、何か問題があると、その行為に目を向けます。しかし、本質的なところは、この親密な交わりをどこに持って行っているのか、ということなのです。その交わりに歪みが出てるので、あらゆるところに影響を与えています。イエス様だけに、泉があります。この方の愛を、ぶどう酒にもまさって慕っているかどうか、なのです。